始まりの場所へ

初心者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
始まりの場所へ

【Ｎコード】
Ｎ５０９９Ｚ

【作者名】
初心者

【あらすじ】
リンクが時を越える物語です。

再開（前書き）

キャラ崩壊ギリギリまでがんばりますので温かく見守ってください。

再開

トアル村

自然が残っているところに馬車がやってきた。

村長とその娘のイリアは突然やってきた客人に驚きイリアは呼びに向かう。

「はぁ！」

今日もトアル山羊を小屋に戻した青年が馬のエポナから降りる。

「今日もご苦労さん」

青年は笑顔で頷く。

「リンクー」

リンクと呼ばれた青年が振り返る。

イリアはリンクの側にやってきて息を切らす。

「リンク、お客さんが来てるよ」

「リンク待たせるのもまずいからはやくいってきな」

リンクは頷きエポナにイリアを乗せて走る。

「はぁ！」

村長の家にはすぐにつき馬から降りる。

すぐに馬車に気づきその様子から誰が来たのか理解した。

リンクは慌てて村長の家の中へ入った。

その馬車の中で誰かが見ていたことも気がつかずに。

村長の家の中に入ったリンクの目の前に知人がいた。

その容姿は王族衣装を身にまとった女性がいた。

「リンク」

女性が挨拶をする。

リンクも久し振りにあう知人に返事をした。

「ゼルダ」

ゼルダと呼ばれた女性はこのハイラルを統治するハイラル王の娘、ゼルダ姫だった。

ガノンドロフからハイラルを救った姫としての功績が評価され女王となっていた。

「リンク、また力を貸していただきたいのです」

ゼルダの表情が暗くなる。

「私、夢を見たんです。再びこの世に闇がもたらされると。最近もう一つマスターソードの夢も見ています。リンクわかってくれますか？」

ゼルダはリンクに手を差し出す。

リンクも手を差し出す。

「ありがとう」

ゼルダは笑顔になる。

「リンク、旅のお供を私からプレゼントします」

リンクは危険な旅を一緒にする相手はいらないと断ったがゼルダは笑顔で言った。

「大丈夫です。あなたと旅したことがあるかたです」

ガチャ

扉が開く。

「リンク」

リンクが振り返るとリンクは笑顔に目には少し涙を浮かべてその者に近寄った。

影の王女

リンクが近づくとその者がしゃべりだした。

「どうしたんだ？ワタシの魅力にやられちまったか？」

と冗談をとばしていた。

「ミドナ」

ミドナと呼ばれた女性は影の世界、トワイライトの王女で過去にトライフォースに対抗して影の結晶石という禁断の力を創造しハイラルから影の世界に追放された一族の末裔だ。

「また一緒に旅をするからヨロシクな」

そう言ってミドナは影の魔力を使い小さくなった。リンクからしたら懐かしい容姿だった。

リンクはミドナを抱き上げる。

「ちょっとハズカシイじゃないか」

ミドナはリンクの影に逃げ込んだ。

「リンク、夢のお告げだと森の聖域にむかって欲しいのです。あとはわかりませんが旅の無事を祈ります」

ゼルダはそう言ってトアル村を去った。

家に帰ったリンクは支度を始めた。

「ヤッパリその服にあってるな」

ミドナはリンクの容姿に感想を言う。

緑の帽子緑の服だ。

準備を終えたリンクは出発する事にした。

「リンク」

リンクの家の前でイリアが呼んでいた。

リンクはイリアのもとへ向かった。

リンクの装備、奥義（前書き）

基本ベースはトワイライトプリンセスの装備です

リンクの装備、奥義

トアルの剣、ハイリアの盾、勇者の服、ゾーラの服、マジックアーマー、アイアンブーツ、ダブルクローショット、ホークアイ、疾風のブーメラン、コピーロッド、スピナー、チェーンハンマー、カンテラ、釣り竿

水中バクダン３０個、弓矢４０本、パチンコ３０個、空きビン３本（妖精入り）

とどめ、盾アタック、背面切り、兜割り、居合い、大ジャンプ切り、大回転ぎり

獣リンク

ミドナジャンプ、ミドナワープ、影の結界

ハート２０、ルピー１０００

イリア

リンクがイリアの前にやってくるとイリアが言い出した。

「行くんだ」

リンクは小さく頷く。

「帰ってきてくれるよね？」

冒険に危険はつきものだもちろん命の保証などない。

リンクは小さく笑みを浮かべただけに留めた。

「いってらっしゃい」

イリアはリンクを送り出した。

リンクは振り向くこともなく走っていった。

イリアは複雑な気持ちでそれを見送った。

「なぁリンク」

ミドナがリンクに話し掛ける。

「あいつ、ホレてたみたいだな」

リンクは驚いた顔をしながらも疑問の表情だ。

「モテモテだな・・ワタシも正直になれならナ」

リンクがミドナをみる。

「なっなんでもない、ほら森の聖域にいくゾ」

ミドナは不思議な形をした石を取り出した。

「さっさとオオカミになってワープするぞ」

ミドナはリンクに石を当てた。

リンクは一瞬にして獣姿になった。

「いくゾ」

リンクとミドナは一瞬にしてフィローネの森から森の聖域へワープした。

退魔の剣

リンクとミドナは森の聖域に到着した。

「リンク、やっぱり石はとれないな、あの剣に頼るしかないナ」

リンクは走り出し聖域の奥にある剣に近づいた。

マスターソード、この剣がガノンにとどめを刺した。

突然、マスターソードが輝きだしリンクの中から石が飛び出した。

リンクが元の姿に戻る。

リンクはゆっくりと台座からマスターソードを引き抜いた。

ゴゴゴゴゴッ

マスターソードが引き抜かれた瞬間に聖域が大きく揺れた。

聖域の下から巨大な石壁が現れた。

マスターソードが輝き、それに反応して石壁が形を変えていく。

何もないところから歯車が出てきて形を変えた石壁について回転をしだした。

「どうやらどこかにつながっているみたいダナ？」

リンクは歯車に近づく。

「いこうリンク」

歯車の間からリンクは走り抜けていった。

ナゾの老婆

しばらく走るとやっと出口が見えた。

「リンク、注意深くナ」

リンクはゆっくりと出口から出た。

出るとそこは何かの建物の中だった。

だが屋根が無いので廃墟だろうか？

「お主は何者じゃ？」

さっきまで走ってきた通路はなくなっていて変わりに老婆がいた。

「場合によっては許さぬぞ」

老婆は左手から青い玉をつくった。

リンクは剣を鞘からだした。

すると老婆の青い玉が消えた。

「まさか・・・それはマスターソードか？」

リンクは頷いた。

「剣を持っている手の甲を見せるのじゃ」

リンクは左手にマスターソードを持ち替え右手の甲を見せた。
「それは勇気のトライフォース！トライフォースを宿しておるのか？」
リンクが頷くと老婆は落ち着きを取り戻した。
「名はなんと言う？」
リンクは自らの名前を言った。
「ほぅ、ではそなたは別の時間から来たのじゃな？」
リンクがよくわからない顔をすると老婆が微笑んだ。
「そなたが通ってきた穴は時の扉といってな時を渡る扉なのじゃ」
リンクは頷いた。
「スカイウォードは知っておるのか？」
老婆が訪ねたがリンクは首を横に振った。
「マスターソードを天に掲げるのじゃ」
リンクはマスターソードを天に向けた。
するとマスターソードに力が集まった。

「それがスカイウォードじゃ、聖なる力」

リンクはスカイウォードを覚えた。

「そなたはこれよりフィローネの森に向かうのじゃ」

老婆がリンクに何かを渡した。

地上の地図を手に入れた。

「フィローネの森へはそこの扉から出ればいけるじゃろう」

リンクは頷き右の扉から出た。

襲われるキュイ族

リンクがフィローネの森を走っていると不思議なことが起きていた。

「リンクもそう思うか？」

さっきまであった魔物の気配が消えていた。

「キュ～～助けて」

少し先に植物が魔物に襲われていた。

リンクはマスターソードを天に掲げ力を溜めた。

素早く走り魔物の集団にスカイウォードを撃った。

ギャーー

一撃で魔物５体を倒した。

リンクは植物に近づいた。

「食べてもおいしくないキュー、キュー？」

植物が起き上がりリンクに気がついた。

「あれ？戻ってきてくれたのかキュー？」

リンクは首を傾げた。

「もしかして道に迷って戻ってきたのかキュー？」

初めてあった相手に失礼だと感じたリンクは不機嫌な顔をしたが話がこじれたら困るので話に合わせた。

「でも助かったキュー、ありがとキュー」

彼らはキュイ族と言って先ほどリンクと同じ格好をしたものに助けてもらったようだった。

「近くまで案内してやるキュー」

キュイ族の案内でツタが垂れている場所に付いた。

「この先が天望の神殿だキュー」

リンクはキュイ族に例を言って先に進んだ。

「リンク、さっきここに来るとき鳥の像があったよな？あっちにもあるな」

ミドナが鳥の像に気がついた。

「ポータルつくっておくか？」

前回の冒険のときポータルワープは助かったのでリンクは賛成した。

「それじゃあ鳥の像の前に来たらワタシを呼びナ」

リンクはなんとか鳥の像の前にやってきてミドナを呼んだ。

「ココダナ、ヨッ」

ミドナが空に指を向けるとあの時みたいな空間ができた。

「ここからは狼でイコウゼ」

ミドナはリンクに石を当てた。

リンクはミドナジャンプを駆使して天望の神殿の前にやってきた。

「ここにも鳥の像がアルナ」

ミドナはポータルをつくり行ける場所を増やした。

「イクゾリンク」

リンクは天望の神殿へ足を踏み入れた。

鉢合わせ（トワイライトリンク視点）

狼姿のまま天望の神殿に入ったリンクだが不思議なことに敵と全く出会わなかった。

あるのは魔物の残骸で誰かと闘って敗れた感じだった。

「もしかしてワタシ達ってイラナカッタ？」

ミドナが悪態をついていた。

リンクはとりあえず先に進むと右の道に穴があり誰かに開けられたら跡があった。

リンクは用心深く入っていった。

すぐに出口にでて降りると周りが水に囲まれた足場に出た。

扉は3つありすべて開いていた。

リンクは正面の扉を開けた。

広い空間にでた真ん中になにやら怪しげなドームがあった。

「ギャウゥ」

ドームの中から魔物の断末魔が聞こえた。

しばらくするとドームの上にある切れ目から謎の飛行体がでてきた。

「ムシか？」

ミドナはまるでおもちゃに興味のある子供の表情になっていた。

一緒に冒険したときの少女の姿だから仕方がないがプリンセスのときの表情だったらとリンクは狼姿でニヤリとした。

「ワッワラウナ！」

先ほどの飛行体はドームの上部にある結晶体に当たった。

すると閉じていたドームの入り口の格子が取れて扉が開いた。

「なっ？」

ミドナは驚いた。リンクも驚いた。

そこに立っていたのは自分が冒険に使っている服をきた瓜二つの青年が立っていたのだ。

しかもこちらを敵と見ているようで臨戦態勢を取っていた。

「はぁあああ」

青年は突っ込んできた。

鉢合わせ（スカイウォードリンク視点）

小さな鍵を開けたリンクは次の部屋にやってきた。

マップをみる限り正面にあるドームの中にアイテムがあるようだった。

「マスター」

ファイが呼んでいる。

「この天望の神殿に新たな侵入者、警戒率８０％」

リンクはこんなところに味方が来るとは思わなかったので敵と判断した。

リンクは正面の扉をあけた。

すると扉に格子がかかり真ん中にある骨が動き出し骨の兵士になった。

苦戦したが倒し宝箱からビートルを手に入れた。

しかし扉は開くこともなくビートルで遊んでいると亀裂を発見してそこからビートルを出して結晶体にあてた。

「マスター、例の侵入者がこの部屋の外にいます」

ファイが警告した。

リンクは扉を開けた。
そこには小さな魔物を乗せた魔物がいた。
（こいつ、今までの敵と違う）
本能的にリンクは感じ取った。
リンクはファイに情報を頼んだ。
「姿形からしてファイの記憶にはありません」
ファイはリンクに謝罪した。
リンクは剣をかまえた。
「はぁあああ」
リンクは魔物に突っ込んだ。

リンク対リンク（前書き）

短いよ

リンク対リンク

1人と1匹の闘いは圧倒的に狼が優勢だった。

剣士が剣を振れば狼は見切ってかわし、そして噛み付き剣士はそれを振りほどく。

1人は先日鳥の儀を終えた騎士学校の生徒に対して狼姿と言えど魔王ガノンドロフを倒した剣士ではまさに天と地の差があった。

体力も剣士が一方的に削られていく。経験の浅さがこの差を生んでいた。

「マスター」

剣士と狼の間にファイが入り込んだ。

「このまま闘い続けるの危険です。逃げることを提案します」

ファイは狼に向く。

「どうか引いてください」

ワォーーー

狼は遠吠えを剣士に浴びせて先に進んでいった。

魔族長ギラヒム

不思議な扉を開ける鍵を見つけたリンクは体力を回復させて扉に向かった。

扉の近くにやってきたリンクを待っていたのは先ほど完敗をきした狼だった。

狼はただ扉を見ているだけだった。

リンクは少し警戒しながらも鍵を思考しながら差し込んだ。

大きな扉が開く。

狼が扉の中へ消えていく。リンクもあとを追う。

中へ入ると扉がしまった。

部屋にはもうひとつ扉がありその前に剣を持った人物がいた。

狼はその人物に臨戦態勢をとっていた。

「ほぅこんなところに来るなんて驚いたよ。あの竜巻から助かってここに来るとはね。まぁ君なんてどうでもいいんだよ、私にはこの先にいる巫女に用がある。おっと名前を言い忘れてたよ。私は現魔族長のギラヒム、気さくにギラヒム様と呼んでくれ」

リンクも臨戦態勢に入った。

「今、私は機嫌が悪いんだ君がその鬱憤のはけぐちになってくれるのかい？まぁさすがに殺しはしないよ全治１００年で許してあげるよ」

ギラヒムは羽織っていたマントを消してリンクと狼に向かってきた。

ギラヒム対リンクと狼リンク

ギラヒムが近づいてくる。右手が赤く発光している。

「はぁあああ」

リンクは突撃して剣を振った。がギラヒムの発光した右手に止められる。

「その程度か？ハハハハ」

リンクは振りほどき剣を振ったがギラヒムは苦もなくかわし後退した。

二人の闘いを見続けている狼リンクとミドナはギラヒムの隙をうかがっていた。

「あれじゃあ勝負はミエテルナ」

狼リンクはギラヒムが全く本気を出していないことを知った。

狼リンクはミドナを見た。

「リンク・・・・わかった」

ミドナは狼リンクから降りて入ってきた扉に避難した。いつでも逃げられるようにして。

「なかなかいい剣だね」

リンクの剣が奪われた。ギラヒムは奪った剣でリンクを攻める。リンクは盾を駆使してかろうじて防いでいるだけだった。

「はぁっ」

バアンッ

リンクの盾がギラヒムの攻撃に耐えきれず破壊された。

「これで終わりだ」

ギラヒムは剣をリンクに向けて投げ槍のように投げた。

リンクは反応が遅れていてさらにギラヒムの攻撃をかわすのにがんばりゲージを使い切り回復している最中だったため投げつけられる剣をかわす体力は残っていなかった。

ワォーーー

次の瞬間、リンクは何者かにおされて倒れた。そのおかげでリンクは飛んできた剣から助かった。

「おまえ・・・・」

リンクを助けたのは狼リンクだった。

「ありがとう、魔物でもいい奴がいるんだな」

リンクは狼リンクがまるで言葉を理解しているみたいに笑ったのを

見逃さなかった。

リンクは剣をつかみギラヒムと向かい合う。

ギラヒムは余裕の笑みで近づいてくる。

すると狼リンクがギラヒムの右手に噛みついた。

「くそっはなせ」

リンクは狼リンクがつくってくれたチャンスを見逃さなかった。

「はぁあああ」

リンクはギラヒムを斬りつける。

「なかなかやるね、ならこれならどうかな？」

ギラヒムが指を鳴らすと剣がギラヒムのそばに現れた。

盾のないリンクにはかなりまずい展開だった。

ギラヒムが距離をとりかまえる。

「はぁあああ」

ギラヒムが突っ込んでくる。

リンクは剣をかまえる。

その間に狼リンクが入り込んだ。

ギラヒムの標的がリンクから狼リンクに移り狼リンクが斬られる。

しかし一瞬の隙が生まれリンクはギラヒムを攻撃してダメージを与える。

ギラヒムの攻撃を狼リンクが受けリンクがその隙に攻撃してダメージを与えていく。

「くっなかなかやるね、だがそれはその剣とその魔物のおかげだからな、さて君と遊んでいる間に巫女が移動したようだ。次は邪魔しないでね。次は１００年じゃすまさないからね」

そう言ってギラヒムが消えた。

和解

ハートの器を手に入れたリンクは一刻もはやくゼルダを探さなければならない。

リンクはビンから妖精を出して魔物に浴びせた。

魔物の傷口が引いていく。

「ダイジョウブか？」

魔物に連れ添っていた魔物が心配をしていた。

「ありがとう」

リンクは魔物に礼を言った。

「最初から組んでいればよかったジャナイカ？」

ミドナは悪態をついていた。

リンクと狼リンクは先へ進み綺麗な泉についてリンクがスカイウォードで紋章を起動させて新たな石盤を入手した。

「またな」

リンクは走ってどこかに行ってしまった。

「封印の神殿にモドルカ？」

リンクはポータルワープで封印の神殿へ向かった。

ミドナの力

封印の神殿の近くへやってきたリンクはマスターソードの力で人に戻った。

「リンク、ちょっといいか？」

ミドナがリンクに話し掛ける。

「ワタシと一緒に旅したときよりワタシ魔力が強くなったよな？実はあの影の結晶石がガノンドロフに砕かれたときにその魔力がワタシに吸収されたんだ。だからポータルをつくれる多分あの姿にもなれる。だけどトライフォースには及ばない。ソレだけさあとはこの姿にもなれるくらいだ。そのおかげでリンクとまた一緒に・・・」

ミドナは小さな手でリンクの頬に触れる。
そして小さな身体でリンクを包む。

「一度でいいからこうしたかった。あの時別れのときもこうした。だけどしてしまうとワタシのケッシンが揺らいでしまうからこらえた。でもまた逢えた、だからもう我慢しない。」

小さな力で抱きしめられたリンクはなんだか強く感じていた。リンクもミドナを抱きしめる。逢いたかった気持ちをミドナに向ける。

「なんだかハズカシイナ」

ミドナはリンクの影に戻った。

リンクは封印の神殿にいる老婆にあいに向かった。

オルディン火山へ

謎の老婆はいつもの場所で座っていた。

「そうか似ている人物とな？その者はある使命があるのじゃ。ソナタもあったじゃろ？」

老婆はリンクに諭す。

「オルディン火山へ向かうがよい。そこがあの者の次の行き先じゃ」

リンクは地図を開く。

「ここじゃ」

なんとなくデスマウンテンを連想した。

「さてここからどう行けばいいじゃろうか？」

リンクは笑みを返した。

「ほぅソナタにはパートナーがおるみたいだな？」

リンクは頷きミドナを呼んだ。

「ワタシだ」

老婆の顔が少し変わった。

「ほほぅ、ソナタは魔物ではないなどちらかと言えば人じゃな？」

ミドナは驚いた。

「アンタ結構すごいんダナ」

老婆は笑う。

「魔力は強く、扱う心も強い暴走することはないのぅ。それにリンクの影から出てきたところを見ると影に関連するかもねぇ」

老婆の鋭い感に驚きながらもリンクとミドナは神殿をあとにした。

「わかってるヨ」

リンクは自分のいた時代の地図と地上の地図を合わせ自分の時代のポータルの位置を合わせる。

「ダイジョウブ、いけるぞ」

ミドナは空に向かって髪を向けてオルディン火山の方角に向かって魔力を飛ばした。

「さぁイコウゼ」

リンクは狼になりミドナと共にワープした。

その直後にもう一人のリンクが封印の神殿へ追いついた。

襲われている巫女

ワープしてたどり着いたのは前の地図でいうデスマウンテンの真下である。

「ここにも像があるナ」

ちょうどポータルの近くに像があってひと安心した。

道は右と正面に分かれていた。

「ひとまず人に戻ろう」

リンクは元の姿に戻り正面の道に進んでいった。

いたるところにマグマがあってまさに危険と隣り合わせの場所だった。

ヒュッ、ストン

近くに矢が降ってきた。見上げるとフィローネの森にいた敵がいた。

リンクはすぐさまホークアイと弓を装備して正確に敵を弓矢で射抜いていった。

「リンク、この坂はこの姿じゃ無理ダ」

ミドナの進言にリンクは再び狼になり坂をダッシュでのぼる。

「キャー」

登りきったところで目の前で女性がおそわれていた。

リンクは敵を蹴散らした。

女性が立ち上がる。

「ありがとう、私はゼルダです」

この人があのリンクが捜していたゼルダだった。

「アンタがゼルダか？アイツが捜していたのは」

ゼルダはミドナに話し掛ける。

「リンク？リンクは無事なのですか？」

ミドナはあのリンクの無事を告げた。ゼルダは安心した。

「さぁ帰ろうぜ」

ゼルダの表情が曇る。

「私にはすべきことがあります。だからまだ帰ることはできません。私はこの大地の神殿に行かなければ」

ウガー

近くで魔物の集団の声が聞こえた。

「私は行きます」

ゼルダが先に行こうとしたときリンクはゼルダの前に立ちふさがった。小さく頷く。

「ついてきてくれるのですか？感謝します」

リンクは狼姿のまま大地の神殿に足を踏み入れた。

襲われている巫女（後書き）

ただいまスカイウォードリンクはオルディン火山の入り口に空からやってきて火山に向かっている最中にモグマ族に出会っているくらい。

大地の神殿

ゼルダと共に大地の神殿へ入ったリンクはゼルダを襲ってくる敵を噛み付きや影の結界で一掃していった。

少し進むと部屋のほとんどがマグマになっている部屋についた。

「どうしましょう？」

ゼルダが困った表情をする。

部屋の中央に魚みたいな像がありそこには爆弾花らしき爆弾があった。

「まかせな」

ミドナは魔力で玉をつくり爆弾花へ飛ばした。

玉が爆弾花へ当たった瞬間大爆発が起きて像が吹き飛びマグマに溶けなかった大きな玉がやってきた。

「任せてこれでも鳥乗りだから」

リンクとゼルダは玉に乗り絶妙なバランスで対岸へ到着した。

その先で巨大な扉みたいなものがあった。

扉は開かれているが段差が足りずゼルダは登れなかった。

「ヤレヤレ」

パチンッ

ミドナが指をならすとゼルダが消えた。

リンクはミドナジャンプで渡るとミドナはまた指を鳴らしゼルダを出現させた。

「あらっすごいのね」

ゼルダに褒められたらミドナは満更でもないようだった。

しばらく進むとゼルダの目的の場所がマグマの滝で塞がっていた。

あの像からでているマグマをなんとかしないとダメらしい。

「完全にテヅマリダ」

ミドナが悪態をつく。

ミドナは周りをみてニヤリと笑う。

ミドナは髪を動かしこの部屋の奥にある丸い岩に向かって何かをした。

「ウーヤッ」

岩が持ち上がりミドナは像の口の中へ岩を放り込んだ。

岩は見事におさまりマグマが止まった。

「さっイコウゼ」

ゼルダは唖然としていたが進んだ。

例のごとく不思議な鍵穴の扉があって立ち止まる。

ゼルダはハープを取り出し何かを奏でる。

すると扉が開いた。

「さっ行きましょう」

どや顔のゼルダにリンクは笑いあとに従った。

大地の神殿（後書き）

ただいまスカイウォードリンクは大地の神殿に侵入して爆弾を手に入れたあたり。

女神の使い

大きな扉を抜けて階段を上ると直線の部屋についた。

ウガーウガー

沢山の敵が出てきた。さすがのリンクもゼルダを守りながらは難しい。

すると突如として敵の集団の一部が倒された。

リンクとゼルダが見ると女性が右手に玉を作っていた。

リンクも動きだし敵を倒していきようやく倒すことができた。

「ゼルダさまご無事で？」

女性はゼルダに話しかけていた。リンクはゼルダに近づこうとしたが女性が止める。

「魔物がなにをする」

女性は明らかに敵意を出していた。

「待って、この子は私をいままで護ってくれていたのです。攻めた場合は私は許しません」

ゼルダは強い態度をしめした。

「申し訳ありません」
女性はゼルダと狼リンクに謝罪した。
「私はインパ、女神さまの使いでゼルダさまをお守りします」
インパは狼リンクの方を向いた。
「助かったありがとう」
リンクは頷いた。
「では参りましょう」
インパを加えた一行は泉に到着した。
ゼルダは女神像に祈りを捧げ次の目的地は時の神殿だと伝えた。
場所はラネール地方だと言った。リンクの記憶だとフィローネの森の最深部、迷いの森の奥、森の聖域がその場所だと思っていた。
「違う場所なんだナ」
ミドナはつぶやいた。
「早速行きましょう」
すると目の前に光がでてきた。
なるほどつまりゼルダはこの光で移動していたらしい。

「あなたはどうしますか？」

ゼルダが狼リンクに話し掛ける。

断る理由も無いので頷く。

「ありがとう、狼さん」

ゼルダとインパと狼リンクは光の中に入っていった。

女神の使い（後書き）

ただいまスカイウォードリンクは狼リンクとゼルダが使って向こう岸にある球体をどうやって引き寄せるか考え中。

ラネール砂漠にて

光の中を進むとあたりが砂の景色の砂漠に着いた。

「ここがラネール砂漠です」

ゼルダが伝える。リンクはゲルド砂漠を思い出した。ゲルド砂漠の先にある砂漠の処刑場の陰りの鏡が安置されていたリンクとミドナが別れた場所、正直嫌な思い出だった。

「ドウシタ？」

ミドナがリンクの表情をみて言った。リンクは首を横に振る。

最初にこの世界に着いたときにも思ったがリンクがいた時代にはいなかった敵が多かった。しかしそれほど強い訳ではないが。

「何でしょうこれは？」

青い色をした石が置かれていた。その周りには骨が散らばっていた。他にも土偶みたいなものまで置いてある。

「これは時空石です。刺激を与えると一定の範囲ですが過去に戻ります」

インパの説明にゼルダは頷く。

「恐らくですがこの骨は魔物の骨でしょう。そしてこの土偶は機械亜人です。状況をみる限り魔物によって破壊された機械亜人と過去

に何者かに倒された魔物と言ったところでしょう。例え助かっても何時かは壊れてしまいますが」

ゼルダは複雑な表情をしていた。

「でも、助けてあげたい」

インパは頷き時空石を叩いた。

すると当たりが緑に覆われて骨が魔物に変わり壊れた機械亜人が動き出した。

「助けてー」

インパが魔法で魔物を吹き飛ばした。

「たっ助かった、ありがとケロ」

機械亜人を助けながら先に進みトロッコに乗り込みついに時の神殿に到着した。

「ここが時の神殿です」

すでに風化していた時の神殿はただの廃墟のようだった。

時の神殿に入ったときインパは魔法で岩を壊し入り口を塞いだ。

「これで少しは足止めができるだろう」

ゼルダが祈りを捧げだした。

ラネール砂漠にて（後書き）

ただいまスカイウォードリンクはなんとか大地の神殿を終わらせラネール鉱山にやってきたあたり。

ミドナとゼルダ

祈りを終えたゼルダが立ち上がる。

「ミドナ、ちょっと良いですか？」

「ナンダ？」

ミドナはリンクの背中から離れてゼルダのもとへ行く。

「本当の姿を見せてくれますか？」

これにはインパも驚いていた。

「本当の姿だと？」

ミドナはインパを無視して目を閉じる。ミドナが輝いて一瞬のうちに大きくなった。

「キレイですね」

「ベッピンに驚いたカ？」

「あなたはどちらから？」

「ワタシは影の世界トワイライトの王女ミドナ、賢者はワタシを黄昏の姫君と言っていたな」

「そうですか、ならあの魔物の本当の姿は？」

「時が来たら教えてやるよ」
ミドナはリンクを見つめた。
「ミドナあなたはあの魔物が好きなのですか」
「ナッナニヲ言ってるんだ？」
ミドナは顔を赤くして否定した。リンクはインパと一緒に少し離れていたため聞こえない。
「あなたの目は恋する乙女と同じ」
「ウッウルサイ」

ミドナは再び小さくなりリンクに乗った。
「ミドナ様知らなかったとはいえ失礼しました」
インパがミドナに謝罪した。
「キニスンナ」
ミドナはなんとも思っていなかった。するとゼルダが祈っていた場所から巨大な歯車が出てきた。
「これはワタシたちが通って来たヤツじゃないか」

「やっぱり時の扉を通ってきたのですね」

ゼルダは落ち着て言った。

「ソウダヨ、ワタシたちは別の時間から来た」

「今からまた別の時間へ行きます」

ゼルダが時の扉に触れると扉が開いた。それと同時に別の場所からもう一人のリンクがやってきた。

ミドナとゼルダ（後書き）

スカイウォードリンクがやっと追い付いた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5099z/

始まりの場所へ

2012年1月4日08時45分発行